

# NEWSLETTER

International Lake Environment Committee

= 財団法人 国際湖沼環境委員会 =

このニュースレターには、英語バージョンもあります。

## 今後の ILEC の活動情報

トーマス・バラトール

ILECでは、これから数多くの重要なイベントが目白押しです。ILECの活動も、非常に忙しく活発になってくるものと考えられます。以下の活動の多くについては、このニュースレターで詳しく述べられていますが、ここで手短にご紹介します。

### 2002年12月9日～11日

“Practical Environmental Compliance and Enforcement Approaches- アジア諸国のために、日本の教訓に学ぶ - ” について、世界銀行研究所が、ILECのオフィスにおいて共同で、ワークショップを開催します。

### 2002年12月15日～18日

15日には、琵琶湖博物館において、一般の方々を対象に、「世界湖沼ビジョン(WLV: World Lake Vision)」についてのシンポジウムが開催されます。シンポジウム終了後の3日間は、世界湖沼ビジョン起草委員会が開催され、ほぼ最終版となる「世界湖沼ビジョン素案4.0」が策定されます。

### 2003年1月13日～14日

ワシントンにある世界銀行本部で、GEF(Global Environment Facility: 地球環境ファシリティ)プロジェクトである、「Lake Basin Management Initiative」についての、企画運営委員会が開催されます。

### 2003年3月16日～23日

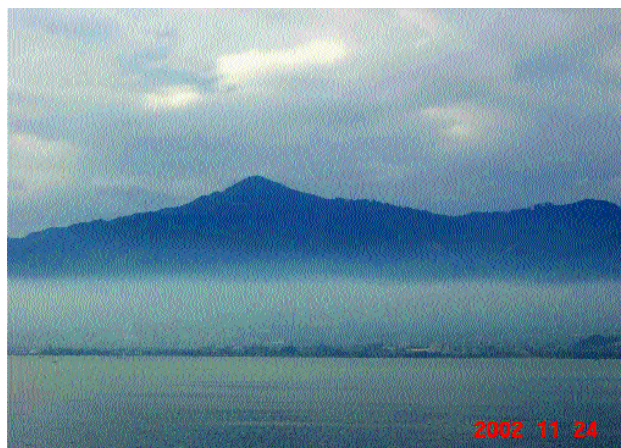
第3回世界水フォーラムが、京都・滋賀・大阪を結んで開催されます。2000年3月に、オランダのハーグで開催された第2回世界水フォーラムでは、湖沼の持つ重要性につ

いて、十分に認識されませんでした。今回の世界水フォーラムでは、およそ8つの湖沼に関するセッションが持たれ、我々湖沼管理に携わる者の努力が報われることとなります。

### 2003年6月22日～26日

ILECが、IAGLA(International Association for Great Lakes Research)と共に、ミシガン湖を望むシカゴのデポール大学で、第10回世界湖沼会議を開催します。今回の会議は、第2回世界湖沼会議が、1986年にMackinacで開催されて以来、初めての里帰りの会議となります。

全体として、湖沼が国際的に重要なテーマになりつつあることは、とても喜ばしいことです。願わくば、これからの何ヶ月間、何年間の取り組みが、湖沼の持続可能な管理に貢献することを望んでいます。



ILECの屋上からの眺め：琵琶湖に映る逆さ比叡と比叡山

## 今号の トピック

### 今後の ILEC の活動情報

「世界湖沼ビジョン」の概要、ヨハネスブルグ会議で明らかに  
クリーブランドとシカゴでの会議報告

世界湖沼ビジョン (Version3.0) が完成

「第3回水環境を主題とする環境教育研修」を終えて

GEFプロジェクト：湖沼流域管理イニシアティブの紹介

GEF第2回総会サイドイベントの報告（北京）

UNEP-IETCとILECにより「天然湖と人工湖」のショート・シリーズ全4巻を刊行  
トバ湖（インドネシア） その潜在性と直面する困難

## 「世界湖沼ビジョン」の概要、ヨハネスブルグ会議で明らかに

ビクター・ムハンディキ

「世界湖沼ビジョン」の原案が、ILEC・滋賀県・UNEP-IETCが中心となって開催した、世界湖沼ビジョン会合において、8月27日発表されました。今回の発表は、8月26日から9月4日にかけて開催された、「持続可能な開発に関する世界首脳会議：ヨハネスブルグ・サミット」への世界各国からの参加者に対して、「世界湖沼ビジョン」を知ってもらうための絶好の機会となりました。さらに、8月28日から9月1日にかけて、ウォーター・ドームにおいて、「世界湖沼ビジョン」の紹介と啓発に努めました。また、「世界湖沼ビジョン」の発表に先立ち、第7回リピングレイクス会議が、8月20日から25日にかけて開催されました。

今回の発表により「世界湖沼ビジョン」は、湖沼の持つ無数の価値 湖沼が直面する数多くの問題 湖沼悪化の根本原因 を明確に述べている重要な文書であるということが、参加者によって認識されました。「世界湖沼ビジョン」は、湖沼管理の指針となる、「行動の原則」を示しています。この「行動の原則」は、「維持可能な湖沼管理」という目標を達成するために実行されるべき具体的な手段につき言及し、取り組むべき方策をより詳しく述べています。最も重要なことは、世界湖沼ビジョンが、湖沼関係者だけでなく、より広範な水関係者全体に有効な手段であると認識されたことです。



## クリーブランドとシカゴでの会議報告

第10回世界湖沼会議の構成と、世界湖沼ビジョンの内容を議論するため、クリーブランドとシカゴにおいて、10月に会議が開催されました。これら一連の会議には、ILECからは松本参事が、また、滋賀県からは、山仲参事が参加しました。さらに、9月に設立された世界湖沼ビジョン起草委員会からも、数人のメンバーが参加しました。会議では、GLC(Great Lakes Conference)及びSOLEC(State Of Lake Environment Conservation)のメンバーと、数々の議題について、熱のこもった議論を行いました。

尚、第10回世界湖沼会議と、世界湖沼ビジョンについて、さらに詳しくお知りになりたい方は、それぞれのホームページをご覧ください。

第10回世界湖沼会議：[www.ilec.or.jp/conference/jpn/wlc/](http://www.ilec.or.jp/conference/jpn/wlc/)

世界湖沼ビジョン：[www.ilec.or.jp/wwf/](http://www.ilec.or.jp/wwf/)



## 世界湖沼ビジョン (Version3.0) が完成

クリーブランドで開催された会議（上記記事）での、熱心な一連の議論を通じて、世界湖沼ビジョンの基本的な構成が固まり、世界湖沼ビジョン(Version3.0)が策定されました。この新しいVersion3.0は、<http://www.ilec.or.jp/wwf/>上で、日本語版と英語版がご覧いただけます。Version3.0は、次の4つのセクションから構成されています。

1. 世界湖沼ビジョンとは
2. 湖沼が抱える主要な課題
3. 行動に向けた原則
4. 行動への呼びかけ：有望な戦略および機会

先のVersion2.0にあった、「決意と行動の必要性」は、新しいVersion3.0では、「3. 行動に向けた原則」となりました。



## 「第3回水環境を主題とする環境教育研修」を終えて

去る10月25日（金）の午後4時から、JICA大阪国際センターにおいて、「第3回水環境を主題とする環境教育研修」の閉講式が行われ、7ヶ国8人の受講生に、修了証書が渡されました。わずか1ヶ月足らずの研修でしたが、大きなトラブルもなく、無事終了することができました。研修で学んだ知識を、自国の環境行政の中で、少しでも役立ててもらえればと思います。では、次に、二人の研修生から寄せられた、研修に対する感想をご紹介します。

### ●【研修生からの感想1 : David Kofi Essumang, ガーナ】

JICA/ILECトレーニングコースに参加して実感したのは、環境教育のプログラムを組む場合、うまく組み立てて、受講者の関心を高めるよう配慮すべきであるということでした。つまり、その内容は、実践的かつ野外調査を主体とすべきであるということです。受講者には、適切に選択され周知された対象から、自分自身で結論を引き出すための、土地（環境）の実態に触れる機会が与えられるべきでしょう。さらに、飲み水の水質を調査し、自分達が投棄した廃棄物がどのような事態を引き起こし、環境配慮を誤ったことによる病気の発生について、その知識を持つよう指導されなければなりません。今回の実践的なコースでは、環境教育者が求める環境の種類を、どのように選べばいいのかということ学びました。こうした取り組みは、日本においては、特に琵琶湖を擁する滋賀県で実践されてきました。

訓練を受けてきたひとりの科学者として、環境教育に関する仕事に対して、私はどのように対処すればよ

いのか、常に迷っていました。水環境に焦点を当てた、第3回目の環境教育コースに参加した結果、現在私は、環境教育者として取り組むべき最善の立場と、心のバランスを手に入れることができました。環境問題は非常に複雑であり、それ故あらゆる分野（歴史、生物学、物理学、社会学、さらには宗教に至るまで）が、環境の悪化に関心を寄せる必要があります。

本環境は、とても汚染されているに違いないと考えていました。研修で草津に滞在している間、自然と現代が見事に調和しているように見える琵琶湖を望む、ILECの宿泊棟に泊まっていました。しかし、すぐに私はその考えが間違っていることに気がつきました。勿論、汚れていない環境など、一般市民に対する強力な環境教育なしに、存在するはずありません。環境が、子供達の判断基準において、重要な価値を持つように、早い段階から環境教育が実施され、また、学校で実施されている環境教育が、日本の将来に、とても大きな役割を果たしていることを学びました。8週間の日本滞在中、地球温暖化から湖沼の微生物学まで、水生環境のほとんどすべての側面について学びました。そして、中には初めてのものもありましたが、様々な実験を行う機会にもめぐまれました。また、環境に関する考えや経験について、他の受講者達と話をする機会にもめぐまれました。



この研修によって私は、日本における環境教育の実践方法を、自国のそれと比較しつつ、私なりのやり方で学びました。今回の研修で得た知識を基に、持続可能な発展を保障するものとして、教育の中に環境教育を取り入れるよう、専門分野が異なるすべての同僚達に、働きかけたいと思います。

(Assistant Lecturer, Dept. of Chemistry, University of Cape Coast, Cape Coast, Ghana)

### ●【研修生からの感想2 : Oudomsack Philavong, ラオス】

今回の研修で日本に来る前は、全国に広がっている工場によって、日

本における環境の状況と、私の国の状況は異なっています。私の国ラオスでは、人口も少なく、また、産業もそれ程発達していないため、自然は今でも良好な状態に保たれています。一方、工業化された日本の環境は、人々によって良好な状態に保たれています。私の考えでは、日本における環境保全の成功を見習うには、今からでも遅くありません。今回の研修で私が得た知識は、ラオスの天然資源の持続可能な利用のため、大いに役立つものと確信しています。

(Deputy Chief of Operation Dept, Lao National Mekong Committee)

# GEFプロジェクト：湖沼流域管理イニシアティブの紹介

## はじめに

ILECは、新たに認められたGEFプロジェクトである「第3回世界水フォーラム支援・湖沼流域管理に向けて：GEFとGEF外の湖沼流域管理プロジェクトでの経験と教訓を共有する」("Towards a Lake Management Initiative in Support of the 3rd Water Forum: Sharing Experiences and Early Lessons in GEF and non GEF Lake Basin Management Projects") の実施機関として、本事業を執行します。

## 1. 地球環境整備基金 (GEF : Global Environment Facility) とは

地球環境整備基金は、地球環境保護のため、開発途上国に資金を提供する制度で、世界銀行 (World Bank)、国連開発計画 (UNDP)、国連環境計画 (UNEP) が中心となり、1991年に設立されました。地球環境保護のため、重点的に取り組む分野は、(1)生物多様性の喪失 (2)気候変動 (3)国際的な水問題 (4)オゾン層の消失 (5)土地の荒廃 (6)不断に継続する有機汚濁の6分野です。

また、制度の目的達成のためのプロジェクトの実施主体としては、国連関係機関ばかりではなく、各国政府機関、NGO、民間企業や民間団体等も実施可能です。

## 2. 湖沼管理イニシアティブとは

### (1) 実施の必要性

現在、世界の湖沼に関しては、「人口の増大、都市化、工業化、鉱山開発、灌漑や気候変動などによる圧力が増大しており、湖沼流域における資源の管理に関して、改善された維持可能な手法が必要とされている。」という認識がなされています。こうした認識を世界が共有し、より持続的な対応を図るためには、水に関する国際的な諸機関が協働して、地方・地域・国家及び地球レベルにお

ける天然湖と人工湖の管理方策を再検討した上で改善する方策を探り、当事者の管理能力強化を図る必要があるからです。

### (2) 実施機関

本プロジェクトは、地球環境整備基金の実施プログラム第10番にリストアップされている「汚染物質関連」に分類されています。世界銀行が実施機関となり、世界規模で展開されることになっています。ILECはこのプロジェクトの直接執行機関として、アメリカのNGOグループである、レイクネット (Lake Net) と協働して、本プロジェクトを運営することになっています。

### (3) 費用と期間

本プロジェクトの総額は約220万\$で、その約45%を地球環境整備基金が、約30%を日本政府が世界銀行に設置しているコンサルタント信託基金(Consultant Trust Fund = CTF)が負担し、残り25%をアメリカ合衆国政府、滋賀県、ILEC、オランダ政府水パートナーシッププログラム、それに世界銀行研究所が負担します。また、実施期間については、2002年から2004年までの18ヶ月間です。

### (4) 目的

本プロジェクトの目的として、次の4つが挙げられています。

#### 1) ケーススタディを通じて、各湖沼

での経験を文書化すること

#### 2) 教訓の共有を促進させること

#### 3) 効果的な湖沼管理対策の学習と実施を加速させること

#### 4) 2003年3月に開催される第3回世界水フォーラムと、第10回世界湖沼会議以降の世界湖沼会議に貢献すること

上記の目的を達成するための主要な活動として

- ・データの収集と電子フォーラム立ち上げ
- ・ケーススタディから得られた経験と教訓の概要の取りまとめ
- ・地域の経験を共有し検証する会合の開催
- ・最終報告書の作成
- ・湖沼管理専門家のリスト作成が予定されています。

#### (5) 対象とする湖沼

当面、30の湖沼を取り上げることとされ、地域別の湖沼数は、アフリカで10湖沼、ヨーロッパ・中央アジアで7湖沼、東アジア・南アジアで7湖沼、ラテンアメリカ・カリブ海諸国で3湖沼、北アメリカで3湖沼ですが、この中には、既に地球環境整備基金が検討を開始している、13湖沼が含まれます。



GEFプロジェクトで見直される30湖沼のひとつのナクル湖



## GEF第2回総会サイドイベントの報告（北京）

I L E C専務理事 小谷博哉

平成14年10月16日から18日の3日間、中国の北京市の北京国際会議センターで開催された地球環境整備基金(GEF)第2回総会にあわせて実施されたサイドイベントにおいて、GEFの中規模プロジェクトとして今年9月に新たに採択された「湖沼管理イニシアティブ」について、I L E Cの小谷専務理事がその内容の紹介を行った。サイドイベントは総会の中間日である17日に設けられ、42の課題について国連機関・各国政府・世界銀行・非政府機関等が主催し、7会場において1課題2時間の日程でそれぞれ順次開催された。I L E C関連のサイドイベントは、日本政府と日本の非政府機関であるIGES(地球環境戦略機関)が共済して実施されたもので、約30人の参加者に対して国際貢献のための日本の環境政策とGEFプロジェクトについての報告と質疑応答が交わされた。議論はラウンドテーブル形式で、以下のプログラムによりIGESの平石尹彦上級コンサルタントの司会の下で進められた。

1. 時間：11:00 ~ 13:00

2. 会場：第4会議室

3. プログラム：

### 開会挨拶

田中 和徳：財務大臣政務官

### 基調講演

「日本の環境政策の発展と国際貢献」

谷津 義男：衆議院議員 元農林水産大臣

### 話題提供

(1) GEFの新たな課題と日本の官民セクターに期待される役割

Alan Miller：GEF気候変動・オゾン層破壊チームリーダー



(2) GEFへの日本民間セクターの参加 - 企業、NPO/NGO、研究者

黒坂 三和子：持続可能な開発のための日本評議会

西田 純：国連工業開発機関東京投資・技術移転促進東京事務所次長

(3) 日本参加のGEF事業例

① クリティカル・エコシステム・パートナーシップ・ファンド(CEPF)

星野 一昭：環境省自然環境局自然環境計画生物多様性企画官

② 湖沼管理イニシアティブ

小谷 博哉：(財)国際湖沼環境委員会(I L E C)専務理事

### 自由討議

### 閉会挨拶

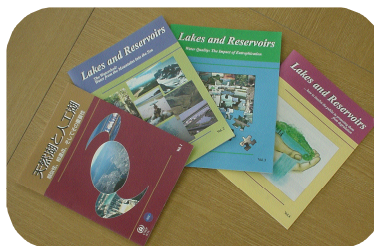
小川 晃範：環境省地球環境局環境協力室長

## UNEP-IETCとI L E Cにより「天然湖と人工湖」のショート・シリーズ全4巻を刊行

ヴィセンテ・サンティアゴ(UNEP-IETC)

このショート・シリーズを作成し、頒布するに際してまず目指したのは、天然湖と人工湖の特性、重要性、その管理に関連する様々な側面を考慮しつつ、天然湖と人工湖に関する情報を、読者に提供することです。このショート・シリーズは、天然湖と人工湖について、すべての情報を包含しようとするものではありません。

このショート・シリーズは、一般の方々にも、天然湖と人工湖について、その理解を大いに深めていただくことを目的にしているため、明確な言葉を使用し、専門用語については、必要最低限のものしか使用していません。このため、一般の方々も、天然湖と人工湖に関する情報を、容易に収集・理解することができます。ショート・シリーズの第1巻では、天然湖と人工湖に焦点を当てて、その管理に関する問題だけではなく、特に、両者の類似点と相違点についても、解説しています。第2巻では、流域に焦点を当てて、記述しています。降雨や降雪により、流域に水が集まるところから始まり、最後に海にた



どり着くまでの、水の流れについて記述しています。

第3巻では、悪化する富栄養化の問題、つまり、リンと窒素という栄養塩が増える過程で生じる現象で、世界中の数多くの湖沼に影響を与えている現象なのですが、この富栄養化問題について記述しています。

最後に第4巻ですが、これらの淡水資源の価値について、一般の方々の意識を早急に高めることの必要性を含め、これらの貴重な資源の保全について、記述しています。

天然湖と人工湖が持つ固有の価値と、それを保全するための努力は、私達が考える以上に大きなものです。一市民として、現在に生きる私達と将来の世代のために、天然湖と人工湖の保全と、適切かつ維持可能な利用を確かなものとするために、関係者が一丸となって、力を合わせて行かなければなりません。このショートシリーズを希望される方は、[order@ilec.or.jp](mailto:order@ilec.or.jp)までご連絡下さい。

トバ湖は、東南アジアで最も大きな人工湖のひとつであり、世界で最も深い湖のひとつです。トバ湖は、大規模な火山噴火によって、何千年も前に形成されました。トバ湖の流域面積は約1,000km<sup>2</sup>で、北西から南東方向の長さは87km、幅は東西に27kmです。また、その最大水深は500mです。トバ湖は、太古の火山帯にある峡谷に位置しており、海拔は904mないし905mです。湖の中央には、北西から南東方向に位置する、長さ45km、幅19kmのサモサ(Samosir)島があります。

トバ湖地域は、インドネシア北スマトラのBukit Barisan岬の最高部にあります。Bukit Barisan岬は、トバ湖に流れ込むすべての河川、マラッカ海峡とインド洋に直接流れ込むすべての河川の源になっています。トバ湖から溢れた水は、アサハン(Asahan)川を通じて、マラッカ海峡に流れ込みます。1982年以来、アサハン川の落水は、水力発電に使われています。水力発電で得られた電気は、Inalum社のアルミ精錬工場で、そのほとんどが使われています。

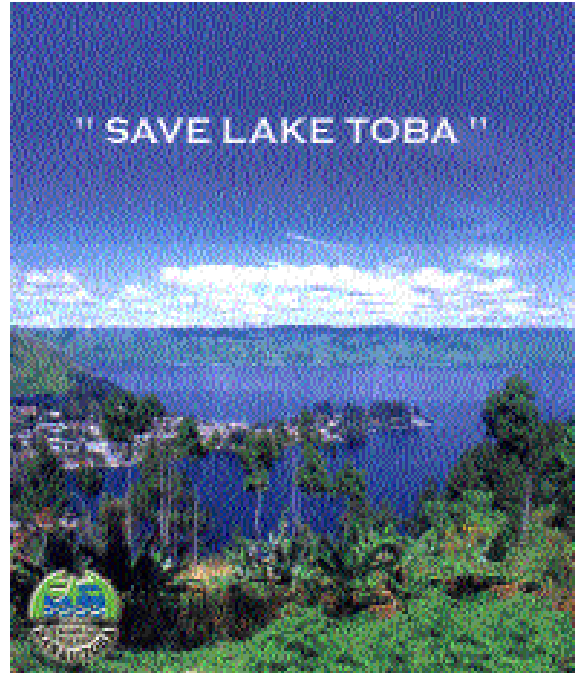
涼しく気持ちのよい環境に加えて、



この地域の豊かな土壌とたんぱく質に富む資源は、トバ湖とその周辺地域を、人々が居住するのに平和で健康的な場所としています。それゆえ、Batak族は、何世紀も前から、この地域を定住地として選んでいます。Batak族の子孫は、5つのグループに分かれました。すなわち、Batak Toba, Batak Angkola-Mandailing, Batak Pakpak Dairi, Batak Simalungun, そしてBatak Karoです。

トバ湖地域は、そこに住む人々の生計にとって、経済的にとても重要な資源に富んでいます。その資源は、主に豊かな淡水資源、豊かな熱帯雨林、農業、それらが織りなすとても雄大で美しい景色から得られるのです。この地域では、どこに行っても、魅惑的で美しい風景に出会えます。サモサ島とトバ湖畔は、Batak族の文化活動の場所です。その文化活動としては、きわめて貴重な歴史的な品々、工芸品、芸術と文化です。この地域の美しい風景と、生物的重要性、Batak族の文化が一緒になり、この地域を潜在的な観光地としているのです。

トバ湖地域は、重要な文化拠点としてばかりでなく、生物的にも重要な地域をいくつも含んでいるため、UNESCOの分類に従っ



て、世界遺産と見なされるかも知れませんが、トバ湖流域は、次の3つの項目について、生物圏保護区として維持されるべきです。

1. 生物多様性の維持
2. 経済的、社会的発展の追求
3. 流域の文化的価値の維持

トバ湖の経済的な潜在性は、トバ湖から流れ出るアサハン川の落差を利用して、Inalum社のアルミ精錬工場の操業に必要な電気を生み出すことで、1982年以来利用されています。発電所とInalum社ができた当初は、これから生じる負のインパクトについて、誰も予想できませんでした。Indorayon社のパルプ・レーヨン工場が、トバ湖の山裾に広がる森林からの材木を切り出し、それを主な原料とすることにより、森林の生産力もまた、1985年以来利用されています。その早い段階から、これらの工場の建設計画は、議論を呼ぶ問題でした。

Indorayon社の最初の10年間の操業



の後、トバ湖とその環境の重大な悪化が明らかになりました。もはや森林には、以前のように木々は茂っていませんでした。無数の木々が切り倒され、広大な森林地帯は、ブルドーザーで切り開かれていました。多くの川は、今では濁り、汚染され、干上がってしまうか、流量が不足しています。

Indorayon社の工場は、丘の飛び地に位置しています。このため、工場から排出される汚れたガスは、涼しい夜や雨が降っている間に地表に落ちますが、落ちる前には、地表からわずか数メートルの高さを漂います。ダイオキシン、ペンタクロロフェノール、トリクロロフェノールといった化学物質を含んだ廃棄物やガスは、蓄積されています。こうした物質は、慢性的な肺の病気、出生障害、免疫低下、神経系疾患等、一連の病気の潜在的な原因となります。トバ湖に流れ込む河川流量は、特に乾季の間、減少し続けます。しかし、Inalumのアルミニウム工場は、発電のためにトバ湖からの流出量を一定に保ちます。これにより、トバ湖の水位は頻繁に、標高902m以下に低下します。これにより、特にトバ湖沿岸に住む人々は、被害を被っているのです。

一般的にトバ湖の利用価値は、いくつかの理由により、悪化し続けています。一番目の理由は、過度の取水による水の供給と、取水量の減少です。二番目の理由は、ますますひどくなる富栄養化に起因する、水生生態系の縮小です。富栄養化とその悪化は、田畑で使われる肥料、未処理の下水や家畜の糞尿、工場排水と雨水排水といった、過度の栄養塩負荷によるものです。三番目は、漁業と舟運のための湖の過度の利用が、湖の環境を悪化させているのです。そ

れゆえ、トバ湖の何ヶ所かでは、植物プランクトン、ホテイアオイ、水性植物やその他の植物が、異常に繁茂しています。

以上のことから言えるのは、トバ湖を健全な状態に保ち、長期間にわたる利用を可能にするためには、湖の利用をめぐる相反する競合関係を解決する必要があります。特に、Indorayon社のパルプ・レーヨン工場、Inalum社の発電所、地域住民による、トバ湖の利用をめぐる相反する競合関係を解決する必要があります。言い換えれば、トバ湖からの取水量と流出量を把握するため、トバ湖流域向けの水関連予算を確保することが重要なのです。

富栄養化、有害物質による汚染、堆砂、魚の乱獲、生物の汚染などの問題を軽減するために、よりよい湖沼環境管理が、導入されなければなりません。危機的な状況にあるトバ湖流域を保全するためには、流域の土地計画が非常に重要なのです。トバ湖にすでに根を下ろした侵入種を根絶するためには、政府、学校、教団、NGOを含め、地域が一体となって取り組まなければなりません。長い目で見れば、トバ湖とその流域に関する大衆教育プログラム、意識向上プログラムは、必要不可欠なものなのです。こうしたプログラムに取り組むため、トバ湖科学教育センターの設立が、特に重要なことなのです。



(President of Lake Toba Heritage Foundation\*)

ホームページ：

<http://www.sustdev.org/laketoba/>

### インドネシア語の豆知識



インドネシア語の語呂合わせとして、よく耳にするのが「人はオラン (Orang)、「飯はナシ (Nasi)、魚はイカン (Ikan)、菓子をクエ (Kue)」というのがあります。初めて聞く人には、ちょっとおかしく感じられるかも知れません。では、次に、水や自然に関する単語をいくつかご紹介しましょう。

水 : Air (アイル)

湖 : Danau (ダナウ)

川 : Sungai (スンガイ)

洪水 : Banjir (バンジル)

森 : Hutan (ウタン)

海 : Laut (ラウト)

植物 : Tanaman (タナマン)

動物 : Binatang (ビナタン)

例えば、皆さんが動物園でよく見かけるオラン・ウータンは、実はインドネシア語で、「森 (Hutan) の人 (Orang)」という意味なのです。面白いでしょう？



## 著書紹介

本年6月25日に、新たにILECの科学委員の一員となられた、ナイロビ大学地質学部のEric. O. Odada教授が、同じくナイロビ大学地質学部のDaniel. O. Olago教授と共著で、「東アフリカの大湖沼 -その古陸水学と陸水学、生物多様性-」というタイトルの本を、近々出版されることとなりましたので、その内容を簡単にご紹介します。

「東アフリカの大湖沼」には、IDEAL (International Decade for the East African Lakes) の主催によって開催された、「第2回アフリカ大湖沼に関する陸水学、気候学並びに古気候学、生物多様性についての国際シンポジウム」に提出された研究論文が収められています。ビクトリア湖、タンガニカ湖やマラウイ湖など、アフリカの湖沼についての包括的な知識と、各湖沼の比較結果について、本書により学ぶことができます。さらに、本書は、東アフリカの湖沼システム、歴史、環境の変化に対する脆弱性を理解する上で、基本書としての役割を果たすものと考えます。貴重な資源である湖沼を、維持可能な方法で管理しようとする場合、本書はその管理方法の決定について、大変参考になるものと思います。

尚、本書に関するお問い合わせにつきましては、<http://www.wkap.nl/prod/b/1-4020-0772-8>にアクセスして下さい。

## ●●●●●●●●●● 今後の行事予定 ●●●●●●●●●●

- 2003年1月19日～3月20日 :  
第13回JICA湖沼水質保全研修(ILEC)
- 2003年3月12日～15日 :  
第2回国際灌漑排水会議(アリゾナ州フェニックス:アメリカ)
- 2003年3月16日～23日 :  
第3回世界水フォーラム(京都・滋賀・大阪)
- 2003年3月29日～4月2日 :  
第3回国際陸水地質学会議(アリゾナ州トゥソン:アメリカ)
- 2003年5月26日～28日 :  
汚染堆積物質に関する第2回国際シンポジウム(ケベック州ケベック:カナダ)

## ●●●●●●●●●● 世界湖沼ビジョンのホームページ更新のお知らせ ●●●●●●●●●●

3月20日・21日の第3回世界水フォーラム滋賀デーまで、残すところ3ヶ月余りとなりました。この間、9月26日・27日の会議において、世界湖沼ビジョン起草委員会が設立され、吉良ILEC副理事長が、その委員長として選出されました。また、10月15日～19日の5日間にわたって、アメリカのクリーブランドにおいて、世界湖沼ビジョン策定に向けての会議が開催されました。このように、世界湖沼ビジョンの策定も、いよいよ最終段階を迎え、クリーブランドの会議で作成された世界湖沼ビジョン(案)について、再度皆様方から広くご意見を募ることになりました。ご意見をお寄せいただける期間は、来年1月末日までです。

尚、今回の更新に際しては、日本語版のホームページを廃止し、英語のみとさせていただきます。但し、世界湖沼ビジョン(案)は日本語でも掲載してありますし、ご意見は日本語でもお寄せいただけますので、多くのご意見をお寄せいただけますようお願い致します。

世界湖沼ビジョン：[www.ilec.or.jp/wwf/](http://www.ilec.or.jp/wwf/) (ILECホームページ [www.ilec.or.jp/](http://www.ilec.or.jp/) からアクセスできます。)

## ●●●●●●●●●● 【図書室からのお知らせ】 ●●●●●●●●●●

ILECの建物を入ると、正面がロビーとなっており、その左奥に図書室があります。

ILECでは、この図書室の一角を、児童図書コーナーとして整備しています。環境関連図書として、今年度新たに45冊の図書を購入し、現在138冊の図書を用意しています。図書の種類は、絵本、図鑑、小説、自伝から写真集まで、多岐にわたっています。



子供さんだけではなく、大人の方々にも十分楽しんでいただける本ばかりですので、ぜひ一度お越し下さい。

図書室のご利用は、平日午前9時から午後5時45分までとなっています。尚、図書の貸出しは行っていませんので、あらかじめご了承下さい。



INTERNATIONAL LAKE ENVIRONMENT COMMITTEE

--事務局--

〒520-2264 滋賀県草津市下物町 1091 (財)国際湖沼環境委員会  
TEL. 077-568-4567 / FAX. 077-568-4568 E-mail : [info@ilec.or.jp](mailto:info@ilec.or.jp)